

### 3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること

<p>(1) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。</p>	<p>(2) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。</p>	<p>(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きること喜びを見いだすように努める。</p>
<p>人は、自然の美しさに触れ、自然と親しむことにより自らの人生を豊かにしてきた面が強い。自然を愛護するということは、人間が自然の主となって保護し愛するというのではなく、自然の生命を感じ取り、自然との心のつながりを見いだして生きようとする自然への対し方である。</p> <p>畏敬とは、「敬う」という意味での尊敬、尊重と、「畏怖」すなわち尊いものを傷つけたり踏みじったりすることを禁じる気持ちという面が含まれている。自然とのかかわりを深く認識すれば、人間は様々な意味で有限なものであり、自然の中で生かされていることを自覚することができる。この自覚とともに、人間の力を超えたものを素直に感じとる心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えてくるであろう。また、この人間は有限なものであるという自覚は、自他の生命の大切さや尊さ、人間として生きることの素晴らしさの自覚につながり、とかく独善的になりやすい人間の心を反省させ、生きとし生けるものに対する感謝と尊敬の心を生み出していくものである。</p>	<p>生命は、かけがえのない大切なものであって、決して軽々しく扱われてはならない。生命を尊ぶことは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直にこたえようとする心の現れといえる。</p> <p>自他の生命を尊ぶためには、まず自己の生命への尊敬、尊さを深く考えることが大切である。生きていることのありがたさに深く思いを寄せることは、必ずや自己以外の生命をも同様に大切にすることははずだという予想と期待があるからである。また、ここでは、主として人間の生命について考えるのが、人間以外のすべての生命の尊さについても価値を置きながら考えなければならない。</p> <p>近年、生徒の生活様式も変化し、自然や人間とのかかわりの希薄さから生命あるものとの接触が少なくなり、生命の尊さについて考える機会を失っている。</p>	<p>ありのままの人間は、決して完全なものではない。人間は、総体として弱さはもっているが、それを乗り越え次に向かって行くところに素晴らしさがある。ときとして様々な誘惑に負け、易きに流れることもあるが、だれもがもつ良心によって悩み、苦しみ、良心の責めと戦いながら、呵責に耐えきれない自分の存在を深く意識するようになる。そして、人間として生きることへの喜びや人間の行為の美しさに気付いたとき、人間は強く、また、気高い存在になりうるのである。また、ここで言う人間としての生きる喜びとは、自己満足ではなく、人からほめられたり、認められたりするという喜び、人間としての誇りや深い人間愛、崇高な人生を目指し、同じ人間として共に生きていくことへの深い喜びである。</p>
<p>中学生の時期は、豊かな感受性が育ってくるとともに、自然や人間の力を超えたものに対して、美しさや神秘さを感じ、自然の中で癒される自己に気づくようになる。このような時期に、美的な情操を深め、感動する心を育てることは、豊かな心を育て、人間としての成長をより確かなものにつなげる。</p>	<p>中学生の時期には、健康に毎日が過ごせるためか自己の生命に対する有り難みを感じている生徒は決して多いとは言えない。身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験をもつことも少なくなっている。そのためか、生命軽視の軽はずみな行動につながり、社会的な問題となることもある。</p>	<p>中学生の時期は、人間が内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せてもっていることを理解することができるようになってくる。しかし、なかなか自分に自信もてないだけに、劣等感にさいなまれたり、人をねたみ、恨み、うらやましく思ったりすることもある。また、一方では、崇高な人生を送りたいという人間のもつ気高さを追い求める心もある。したがって、自分を含め、人はだれでも人間らしいよさをもっていることを認めるとともに、決して人間に絶望することなく、だれに対してもその人間としてのよさを見いだしていく態度を育てることが大切である。</p>
<p>指導に当たっては、自然や、優れた芸術作品等美しいものとの出会いをふり取り、そこでの感動や畏怖の念、不思議に思ったこと等の体験を生かして、人間と自然、あるいは美しいものとのかかわりを多面的・多角的にとらえることが大切である。また、自然を愛し、護ることを通して、有限な人間の力を超えたものを謙虚に受け止める心を育てることが求められる。</p>	<p>指導に当たっては、人間の生命のみならず身近な動植物をはじめ生きとし生けるものの生命の尊厳に気づかせ、生命あるものは互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の念をもつよう指導することが重要な課題となる。もちろん、自らの生命の大切さを深く自覚させるとともに、他の生命を尊重する態度を身に付けさせることが大切である。さらに、2や4の視点との関連のもとで、人間の生命は、人間関係の中で保たれるという側面があることも考えさせたい。一人一人の生活、居場所が保証されることで、人間は、その生命を全うできるということも忘れてはならない。</p>	<p>指導に当たっては、まず、自分だけが弱いのではないということ、人間がもつ強さや気高さを十分に理解できるようにすることが大切である。また、いたずらに、弱さや醜さだけを強調したり、弱い自分と気高さの対比に終わったりすることなく、自分を奮い立たせることで目指す生き方、誇りある生き方に近づけるということに目を向けられるようにすることが大切である。このような指導を通して、内なる自分に恥じない、誇りある生き方、夢や希望など喜びのある生き方を見いだすことにつながる。</p>